

熊本豪雨後初の村長選

ダム計画 相良村の針路は

治水策、振興策 論戦に期待も

任期満了に伴う相良村長選が27日、告示される。球磨川流域に甚大な被害をもたらした2020年熊本豪雨を受け、国土交通省は村を流れる支流の川辺川に流水型ダムの建設を計画。熊本県は総額112億円超の振興策を示す。国と県が進める治水策や振興策とどう向き合い、村づくりを進めるか。災害後初めてとなる村長選では、住民から論戦を期待する声も聞かれる。



国土交通省が相良村柳瀬の川辺川左岸で整備を進める遊水地。23日、同村

流水型ダムの建設が予定される上四浦地区。旧川辺川ダム計画で水没地とされた約70戸が地区外に移転した歴史がある。区長の田中繁喜さん(74)によると、現在の住民は60人ほど。高齢化も進む。

地区住民は旧ダム計画に、ダムサイトを橋代わりにした右岸と左岸の交流や観光のにぎわいを期待した。田中さんは「ダムは白紙になり、人は減った」と、計画に翻弄された地区の歩みを振り返る。「ダムができるかどうか関心はあるが、それよりも高齢者の交通手段の確保や集落の道路など、生活基盤の整備を優先してほしい」と訴える。

県は23年3月、国道445号のバイパス整備や複数



流水型ダムの建設が予定されている川辺川の峡谷＝2023年6月4日、相良村(小野宏明)

の農地の基盤整備など、村の要望を反映した190項目に及ぶ振興策を示した。蒲島郁夫知事は「振興策はダムありきではない」と明言。ただ、今年1月には、自身が任期を終える4月までに、ダム建設地の相良村と、水没地を抱える五木村の双方からダム建設の「同意を得たい」と意欲を示した。

村は、職員を対象に流水型ダムや遊水地整備に関する研修会を開いたり、同じ流水型で既に完成した阿蘇立野ダム(南阿蘇村、大津町)を視察したりして治水策への理解を深める。しかし、吉松啓一村長は川辺川へのダム建設については賛否を示さず、慎重姿勢を貫く。

吉松氏は、国交省や県に對し、村民に流水型ダムの影響を説明するよう求めた。「まずは村民が流水型ダムについて理解することが重要。現時点で自分の考えを表明することは考えてない」と話す。

上四浦から川辺川を10キロほど下った永江地区に住む宮竹義昭さん(67)は、豪雨で川沿いの自宅が床上浸水する被害を受けた。「命と環境の両立」をつたう流水型ダムに当初は期待を寄せたが、今は「ダムが清流にどう影響するか分からないままなら建設には反対」と言う。趣味のアユ釣りが続けられるのか、選挙戦では、ダムに対する候補者の考えを聞きたいと話す。

前回の村長選は豪雨災害の約4カ月前。吉松氏が、4期目を目指した現職との一騎打ちをわずかに4票差で制した。現職は旧ダム計画に反対していたが、当時は、県も「白紙撤回」の状態で、ダム問題が争点になることはなかった。災害を経て、村を取りまく環境が大きく変化している。(川野千尋)